

もの・ひと・かみ

榊 裕 之

飼い犬が主人の心情をどの程度理解できるかということは検討に値することだと思ふ。悲しみにある場合も、怒りの場合にも、おそらく犬は理解できるだろう。それならば、主人が笑つたとしたらどうだろうか。私の限られた経験からすると、犬は当惑するようである。これは、犬が今までに笑うということを経験したことがないことに基くと思われる。(犬の笑いについて研究された方のお話をうかがいたいと思つてゐる)

人間と犬との関係は、人間対人間の関係との間に、かなりの共通点を持つようだ。自分の心の中にあるつかみ所のないものを、一たん、具体的な音波に変換すれば、それはもはや実体ではない。ところが、それが他人の心に達するや、心の中に蓄積された諸概念諸感情のうちのひとつが、そのねむりにより起き上り、彼はそれを、話し手の意志として理解するのである。このような意志の疎通の過程にあてはまらない場合もある。それは、心の中に、全くの準備がない場合にも、話を聞くことによつて新に実体を作り出されるような例である。この過程こそ対話の真髄であると思われる。この2つの過程を両極端として一

般の会話がある程度その中間的な所に位置させることが可能なのである。ここで我々が既に大人になりつつあるということ、新たな実在が会話によって生み出される可能性が極めて小さいことを意味している。というのは、我々の一人一人の持つ固有な概念及び心情の集合がある大きさを占めていることを意識しすぎる余り、他人から来る言葉をすべて自分の概念集合中の要素と関連させてしか理解しないような態度に陥りやすいからである。ここで、十分なる体験と思考の成果として、大きな概念集合を所有する人間の場合には、前述のような行動様式があつたとしても、何ら問題とはならない。しかしながら、大学四年間の過ごし方の差異には、学部により又個人により甚だしいものがある。このことは、我々にとって切実な問題について語った時、それに対する反応が、工学部の学生とそれ以外ではかなり異なっているという点からも明らかなのである。社会を構成する位置から言えば、我々は学生という同一集団に属しているながら、かくも異なつた概念集合を持ち、その共通部分のしめる割合が、今後ますます小さくなっていくことを考えると私は分解してゆく船に、しがみついている乗客の一人のような気がするのである。

専門分化の傾向の著しい現在、我々工学部の学生は、知的興味から、又は己の存在根拠を確固たるものとせんために、専門知識の向上に努力する。これは物質万能の風潮と、より経済的

に強い立場にたとうとする国家・企業・そして家庭の願望と完全に一致するのである。従つて有能なる技術者は、退屈することなく、次々と生じる問題に解決を与えることにより充実した一生を送り得るに違いない。

ところが、不幸なことに、月並な才能（これさえも誠に有難いものであるが）しか持ちあわせていなかった人間にとっては物と自分とを対座させて一生を過ごすことはとてもできないことである。それは、自分の行っていることを、かならずそれより巧みに処理していく人間がいること、即ち、自分らしさの必要としない所に、自分を没入してしまふことがとても、できないという自意識からでているのである。このような自意識というのは幼稚な競争心が美しい装いで顔を出しているにすぎないとも考えられるが、私としては、その他の意味を考えているのである。というのは、前に述べたように、他人との間には、同じ人間という共通の基盤を持つていながら、意志の凌通が恐しく困難になりつつある状態、即ち分解寸前の船上にいる自分と他人の姿を考えた時、自分にできる唯一つのことが、その自意識を明確にすることだと考えているのである。

他人との間に話が成立する為には、相手に関するある程度の知識が必要である。法学部の学生、又医学部の学生の心を占めているものが向であるかある程度知っていることは良い。しかし、それらに関する話というのは、対話のきっかけを与える

にすぎない。もしも我々が多くの書を読み、多くの人間の話を聞いて他人の活動に関する知見を得たとしても、それ等はすべて話のきっかけを与えるにすぎない。それ等は互いの心の中できれいに整理分類されて何もなかった状態に戻ってしまうであろう。だから私はじたばたしない。他人との共通の基盤を求め、逆説的な言い方だが、何が最も自分らしいかを捜したいと思う。技術者たることと自分であることとはどう係わりあっているのか。これ等を考えたいのである。与えられた燈はそれほど明るくはない。しかしそれで、どこを照らすかは全く個人の自由に委ねられている。私の場合、燈を一ヶ所にあつめてその明るさを競い合う等というのは御免である。どこか暗い所について、自分の燈が消えていないのを確認したのである。

さてこのようにして、最も自分らしい姿に達する作業を通じて、他人と自分を結ぶもの、人間としての共通基盤に触れることができるような気がするのである。ぶどうの小枝である私は、隣りの小枝の葉ぶりを見てそれに近うこうとは努めない。自分のよって来る所の幹に立ち帰り、隣りの小枝に流れゆくうらおいあるものを、そこに見出したい。技術者も医師も法学士も、すべて同じ幹に連なると信じたいのである。